

二月十八日

弾

「総員退去」「文月」沈没

三号敷設艇にて警備隊上陸す

戦死九人、重軽傷者三四人

戦果、砲火により三機撃墜

上海陸戦隊員

福岡県 篠崎数馬

私は、大正十一（一九二二）年九月二日、福岡

県糟屋郡新宮町大字湊で生まれました。

家業は農業です。水田一町三反（裏耕作に玉葱、

馬鈴薯、麦）畑七反（サツマイモ）等です。農閑

期には日雇い労働者（土方）などしていました。

入隊当時の家族は、次のように十人家族でした。

祖母 健在

父 健在 農業 町内会長

母 健在 農業

長男（本人） 健在 農業

次男 健在 学生

三男 健在 学生

四男 健在 学生

妹三人 健在

私が兵役のため家を出ることはちよつと苦しいことでした。徴兵検査は昭和十七年八月でした。目が悪くて第二乙種第一補充兵でした。

昭和十九（一九四四）年一月一日、召集令状が来ました。

昭和十九年二月一日、佐世保第一海兵団へ入団しました。数日して、立付（任地決定）があり、上海陸戦隊の配属新兵として一個分隊二百人が上海へ行くことになりました。

佐世保より上海へのコースは、民間の貨物船（二四〇〇トン）に乗り、私は第三陣の五十人でした。対馬海峡へ出ると船が大きく揺られて、皆船酔いに苦しみました。朝鮮の西海岸を北上して、黄海を渡り支那の沿岸を南下。その間敵の潜水艦の魚雷への警戒、敵の飛行機の監視等の勤務もあつて、四日間の航海期間中も強く生き抜くことを要求されました。思えばもう既に、実戦場に身をおいて、さらに奥地へ進攻している状況であります。弱音を吐いている場合ではありませんでした。

迂回、そしてジグザグコース等を繰り返して、四日間かかって三月十日、上海の海軍軍需部の棧橋へ着きました。とにかく目的地についてホッとしました。トラックで陸戦隊へ。ここで昼食をとりました。

そして上海で一番大きい瀘北隊へ入隊しました。この部隊は新兵教育部隊で、いつも約二百人の新兵が教育を受けています。

ここで三カ月間の新兵教育となりました。教育の内容は陸戦隊だから陸軍の歩兵と同じ、三八式歩兵銃が全員に渡される。隊には軽機関銃、擲弾筒、重機関銃までありました。班長さんが厳しい人柄の人で、銃、筒の分解組み立てを、目隠しをして手探りでやらされました。理由は「戦場で夜間真暗闇の中で、銃や筒が故障した時、懐中電灯、マッチ、ローソク等で照明すると、敵から丸見えだ。狙撃や集中攻撃で即お陀仏となる。暗黒の環境で光なしでも分解組立をしないと、即負け部隊となるぞ。全員戦死だ！」と。

班長さん曰く「自分の郷里の先輩軍人で勇士がいた。支那事変の戦線でその人は重機に分隊長であった。ある夜、敵大部隊の逆襲があり、友軍は皆陣地に配備して応戦した。味方は小勢、敵は何十倍もの多数。味方は弾薬の節約など考えることもなく、銃身をクリークの泥水に浸してタオルで冷して撃ち続けた」と。

その内、自分の重機関銃が突然故障で弾丸が出なくなつた。射手は夜の闇に故障の排除もまゝならない。隣りの部隊からは「重機撃たんか！何をしよりや！早く撃て！撃ちまくれ！」と罵声がひどい。

その時分隊長は慌てず静かに射手と交替し、心の中に故障排除のための操典の一行一句を唱えて、熱く焼けた部品を一つ一つ取外し、折損か？ 毀損か？ 何か？ とたしかめて行く間に、バネが一つ折損しているのが判明、バネの代替品を取り替えて故障を直した。その間友軍の叱咤、矢の催促等はその勢を増して来る。それどころか、支那

兵が陣地を乗り越えて侵入して来て、銃身を握ろうとし始めた。分隊長は「コリヤー！」と大声で脅し上げると、支那兵は銃身を離した。

新しい弾倉と差し替えて、天地の神仏、故郷の神社仏閣に祈りをこめて静かに引き鉄を引いた。あら、嬉しや、銃は性能通りの機能を發揮して、敵兵は一瞬にして倒れ伏し後退を始めた。新しい弾倉を次々と取り替え撃つて撃つて撃ちまくつた。敵は沢山の遺棄死体のまま退く。敵はいなくなつた。

友軍からは感謝とお礼の言葉が潮のようにくる。「陣地防禦成功！ 敵大部隊撃退成功」。隊長殿よりは固く手を握られ、肩をたたいて喜んで頂いた。この戦闘の功績により、この分隊長は「金鵝勲章」授与の榮譽に浴したと。陸戦隊の班長さんの有難い訓話でした。

さて、陸戦隊の新兵は一生懸命に目隠しをして、銃の分解、組み立ての訓練に励みますが、なかなか大変で思うようにはできません。必死です。そ

の内に夜就寝してから頭の中で考え、両手を働かせて銃の取り扱いをする隊員もあらわれる有様でした。何カ月かして、目隠しで仕事を成功させる優秀者も出て来ました。

できぬ者、できる者。班長さんのやり方では、できる者には賞状を出してくれました。私も頑張った賞状を受け内心ホッとしました。ただ、それだけの努力、奮励の成果を充分に発揮する実戦のチャンスに恵まれず、残念です。

また、陸戦隊でも歩兵と同じく銃剣術の稽古が厳しかった。相手が倒れて起き上がれぬまで、必死の攻撃を加える残酷さであった。私も懸命に稽古をして頑張りました。それは現在六十年経って思い出しても身の毛もよだつ厳しさでした。その他新兵教育では叩かれたこともありました。

「軍人精神注入棒」で腰や尻を叩かれたのは、もう多言を要しないことです。

上海時代の辛い思い出としては、まず空腹に困

りました。入隊前に自分は農家にいたので、御馳走はなくても常に腹を満たしていました。軍隊ではどうにもなりません。勿論オヤツも皆無です。新兵から古兵になると酒保の利用もできて助かりました。

次は病気です。マラリアにやられた人もいましたが、私は幸いにもマラリアには縁がありませんでした。その代わり赤痢にやられました。班長さんに申し出ました。班長さんは「医務室へは行くな。行くと隔離されて、どこか分からない所へ入れられて、その後消息不明である。よいか。ここにおれ。薬は貰って来てやるから、それを飲んで静かにしておれ。医務室へは行くな」と。

隊内では楽な仕事の番兵をして、クリークの冷たい水で浸したタオルで頭を冷し続けました。その内に、上水道の水を飲めと教えられて、私は毎日上水道の水をガブガブと飲み続けました。しばらく続けている内に、有難いことに赤痢は治りました。班長さんに報告すると大変喜んでくれました。

助かりました。今でも毎朝コップ一杯の水を飲む習慣が私の健康法です。ついでに外出より帰宅するとウガイと手洗いを続けております。

さて、三カ月の教育が終わると日本の海兵団へ帰ります。私達は配属新兵ですから五月一日、本部で立付（任地決定）があり、私は十人と共に瀘北隊の定員分隊に残ることになりました。内地の海兵団でも大きい部隊には、定員分隊があつてその部隊を守る分隊です。明けても暮れても番兵です。定員外はいないので、一人病気で休むと誰かがその人の代わりをしてやらねばなりません。

その番兵と言うのは、朝一直（八時より十二時）に立つと、その夜の一直（〇時より二時まで）、夜が明けてその日は二直（十二時より十六時まで）、そして夜の二直（二時より四時まで）。

その日は立たずに、明け直と言って四時より八時まで、その次は三直で（十六時より二十時まで）、明くる日は四直で（二十時より〇時まで）、次の日

は非番です。非番の日は公用外出に出ることもありません。

公用外出とは、午前二人、午後二人、自転車で文書箱を本部に持って行ったり、手紙を軍需部へ持って行き、内地から来た手紙を受け取って来るのです。

一番辛かったのは赤痢を患った時でした。熱は三九度〇四〇度も出て、吐く、下す、おカユを湯飲みに半分位食べても戻してしまい、へとへとになつても番兵には立たねばならない。クリークの水で額を冷やしながら立っていました。薬は班長が医務の方から貰つてくれるのですが、良くなりません。こんな事では死んでしまうと思い、飲んではいけない上水道の生水を大食器でガブガブ飲んでみました。何日か経って熱も下がりよくなりました。自分でもビックリしました。

昭和二十年五月頃より腰のあたりが痛み出し、軍医は神経痛だと言いました。銃剣術などをする

と、よろめき回って苦しんでいました。復員して九大で手術をした時は、もう腎臓が化膿して破れる寸前でした。右の腎臓を摘出して左の腎臓だけで今に生きさせて頂いています。

もう一つの話。隊内には重機関銃はありませんが、歩兵部隊のように馬がいなかったことです。隊内に馬がいると、いないとでは想像できぬ労苦の差がある。海軍陸戦隊には馬がいなくて助かった。若さと不屈の精神でやりとげたと思う。その外、隊内での不祥事、事故等は一切なく幸せな海上生活でした。終戦まで瀟北隊にいました。

内の守り……新兵の逃亡等を防ぐ

外の守り……テロよりまもる
でした。

昭和二十年八月十五日終戦となる。四〜五日前から支那人は「先生さん！日本負けた」と言っていました。戦後は、鉄くずの入ったきたないドングロスの袋をかっついて貨物船に積み降ろしをや

らされました。

昭和二十一年一月十九日、ウースン発の米軍上陸用舟艇で内地へ。帰りは往きの半分の二日で佐世保の引揚港である浦頭うらがしらへ上陸しました。

針尾（はりお）海兵団へ二泊後、解散復員しました。一人当たり千円を支給されました（二等兵曹という下士官のため、兵は一人当たり五百円ですが、その兵の二倍です）。

有蓋の貨車で佐世保より博多へ、途中で鳥栖の駅頭で進駐軍の米兵と若い日本人の女が馴れ馴れしく接しているのを見せられて、日本人が何と違うのだらしない事だろうと憤慨しましたが、後でいろいろと話を聞くと、あの怪しい若い女のお陰で、日本女性が米軍の暴力から守られたと知らされて、何とも言えない気持ちでした。戦敗国の悲哀でしょうか。

逆に内地へ帰り、有難く嬉しく感じたのは針尾島の住民の方が、夜道を歩いて行く帰還兵の足も

とを照らしてくれて、提灯をつけて守ってくれたことです。日本国民の精神未だ健在なりとの感激に頭が下って嬉しかった。

博多より新宮へは宮地線でした。実家へ帰ることについて、昼間に帰ることが辛くて駅の線路の横の草むらへ姿を隠して、夕方暗くなるのを待っていました。

ちようどその時、地元の顔見知りの人、数人に見つけられ、「戦地から元気で帰還して目出度い、早く家へ帰らにゃ」と手を引つ張られて実家まで連れて行かれました。そこで懐かしい我が家へやっと二年ぶりに帰りました。父も母も弟妹も一同が「良かった、良かった」と喜んでくれて、私自身も家族に囲まれてようやく復員のありがたさ、嬉しさを感じ入りました。

昭和二十一年一月二十五日のことでした。

結婚は昭和二十二年一月でした。子供は三人、男、男、女です。孫は六人。妻は昭和四十五年ガンを亡くなりました。

戦後は町の農業委員、農協役員、部落の辻長、選挙管理委員、社寺の総代等をつとめ上げ、地区の元老的存在になりました。